

第三次アングロ・パウハタン戦争とブリテン帝国、大西洋世界 —Lars Adams, *Breaking the House of Pamunkey* (2017)— The Third Anglo-Powhatan War, the British Empire, and the Atlantic World: Lars Adams, *Breaking the House of Pamunkey* (2017)

塚田 浩幸

TSUKADA HIROYUKI

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

Quadrante, No.21 (2019), pp. 261-270.

目次

はじめに

1. 第三次アングロ・パウハタン戦争

1-1. カロライナ地域へのパウハタン連合の拡大

1-2. 1644年の急襲と第三次アングロ・パウハタン戦争の経過

1-3. パウハタン連合の解体

2. 四王国戦争

3. 広域インディアンの同盟

おわりに

はじめに

近世ブリテン史とアトランティック・ヒストリーの研究者は、ブリテンの帝国領域や大西洋地域に存在したアメリカ・インディアンにどれほどの注意を払ってきただろうか。リンダ・コリーは2002年の著書で、ブリテン史研究者のインディアンに対する関心の低さを指摘し、エイミー・ターナー・ブッシュネルは、アトランティック・ヒストリーの概念について、大西洋地域の「空間の支配に焦点を置くために本来的にヨーロッパ中心主義的」であるとの警鐘を鳴らしている¹。このような問題意識をふまえ、ブリテン帝国や大西洋世界といっ

た地理的に広い視座から検討すべき出来事が、1644～1646年にヴァージニア植民地とその地のインディアンのあいだに起きた第三次アングロ・パウハタン(Anglo-Powhatan)戦争である。

第三次アングロ・パウハタン戦争を主題にしたのが、本書 *Breaking the House of Pamunkey: The Final Powhatan War and the Fall of an American Indian Empire* (Crofton: Backintyme Publishing, 2017)である。著者ラーズ・C・アダムズはノース・カロライナ州のチョワノク(Chowanoc)族の一員で、これまでに17世紀のカロライナ地域におけるインディアンとイングランド人入植者の関係についての研究を進めてきた²。本書に序を送っているヘレン・C・ラウントリーは、ヴァージニア州のオールド・ドミニオン大学で教鞭をとっていた文化人類学者で、初期ヴァージニアのインディアンと入植者の関係の歴史におけるインディアン側の視点の分析をけん引してきた。ラウントリーの著書には第三次戦争を扱ったこれまでの代表的研究書がある³。

初期ヴァージニアの歴史に関する研究者は、植民地指導者ジョン・スミスとともにパウハタンやオペチャンカナウ(Opechancanough)といったパウハタン連合の首長、そして神話的人物のポカホン

¹ Linda Colley, *Captives: Britain, Empire and the World, 1600-1850* (New York: Pantheon Books, 2002), 140 (中村裕子、土平紀子訳『虜囚：一六〇〇～一八五〇年のイギリス、帝国、そして世界』法政大学出版局、2016年、184頁); Amy Turner Bushnell, "Indigenous America and the Limits of the Atlantic World, 1493-1825," in Jack P. Greene and Philip D. Morgan, eds., *Atlantic History: A Critical Appraisal* (Oxford: Oxford University Press, 2009), 191.

² Lars C. Adams, "The Battle of Weyanoke Creek: A Story of the Third Anglo-Powhatan War," *Native South* 6 (2013): 170-195; id., "'Sundry Murders and Depredations': A Closer Look at the Chowan River War, 1676-1677," *North Carolina Historical Review* 90.2 (2013): 149-172.

³ Helen C. Rountree, *Pocahontas's People: The Powhatan Indians of Virginia through Four Centuries* (Norman: University of Oklahoma Press, 1990).



タス(Pocahontas)に焦点をあて、入植者とインディアンとのあいだのつば競り合いを描き出してきた。そこでは、第三次戦争はパウハタン連合のエピローグとして扱われるにすぎず、戦争前から人口で上回っていた入植者が戦争を優勢に進め、連合指導者オペチャンカナウの死亡によって戦争が終結したことが概略的に記述されてきた。先行研究において第三次戦争が数段落から数ページに短くまとめられてきた原因の一端は、一次史料の不足にもある。初期ヴァージニアに関する歴史研究における一次史料をめぐる状況は 1620 年代半ばを境に一変する。それ以前については、新たに入植事業に着手した植民地指導者による入植記録、入植事業への投資を促すために本国で発行された宣伝文書、そして、スペインのスパイの報告書などが、編纂のうえ刊行されているほか⁴、インターネット・アーカイブ(<https://archive.org/>)での公開も進んでいる。対照的にそれ以後については研究者によって参照されている一次史料が少ない。第三次戦争について主に使用されてきたのも、植民地議会の記録の他、1649 年に書かれた無署名の記述や、植民地の住人口バート・ベヴァリーが口頭伝承を交えて書いた 1705 年の著書のみであった⁵。

そのような研究状況に対し、アダムズはこれまで参照されてこなかった一次史料を使用し、オペチャンカナウの無謀な戦争としての第三次戦争の歴史像に異議を唱えた。その史料とは、マサチューセツ湾植民地指導者ジョン・ウィンスロップの記述や近年編纂されたヴァージニア植民地総督ウィリアム・バークレーの関連文書である⁶。これらの史料を用いて、アダムズは、第三次戦争までにオペチャンカナウが連合陣営の強化をはかったことや、戦争中において入植者が物資の不足にひどく苦しんでいたことを明らかにした。

本稿では、第三次アングロ・パウハタン戦争に

関するアダムズの解釈の検証を行なうほか、ブリテン帝国や大西洋世界といった地理的に広い視座に立ったアダムズの分析を、近年の近世ブリテン史やアトランティック・ヒストリーの研究動向に位置付ける。アダムズが新たに参照したウィンスロップの史料には、オペチャンカナウがイングラント人内部の動乱の様子を見て第三次戦争を引き起こす絶好の機会と考えたこと、つまり、ヴァージニア入植者とインディアン王国の戦争がブリテン諸島で起きていた三王国戦争と連動していたこと、そして、ヴァージニアから 600 マイル以内のインディアンがヨーロッパ人入植者に対して同盟をつくっていたことが述べられていた。これらの記述をブリテン史とアトランティック・ヒストリーの枠組みで検討すると、第三次戦争は、ブリテン帝国全体で起きていた四王国戦争の一部であり、また、大西洋世界において進展するヨーロッパ人の入植に対する広域のインディアン同盟の抵抗運動の一部だったとの見方ができるのである。

1. 第三次アングロ・パウハタン戦争

1-1. カロライナ地域へのパウハタン連合の拡大

パウハタンが 16 世紀後半に 6 部族を引き継いでから拡大させた連合は、1607 年の時点で少なくともチェサピーク湾地域の 30 部族 14,000 人程度を配下に入れていた。しかしながら、パウハタンの権威は連合の領域内で均質ではなく、周縁地域に位置するポトマク川沿いのポトマク(Potomac)族やイースタン・ショアのアコマク(Accomac)族は地理的な距離の遠さから比較的大きな自由を享受していた。そして、ポトマク族やアコマク族は、ヴァージニア入植者の増加に伴い、1610 年代に連合よりも植民地との関係を重視するようになった。1630 年代には、チェサピーク湾地域のパウハタン連合の諸部族は移住や統廃合を経験し、人口もヴァー

⁴ Philip L. Barbour, ed., *The Jamestown Voyages under the First Charter, 1606-1609* (Nendeln: Kraus Reprint, 1976); id., ed., *The Complete Works of Captain John Smith (1580-1631)* (3 vols.; Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986); James Horn, ed., *Writings with Other Narratives of Roanoke, Jamestown, and the First English Settlement of America* (New York: Library of America, 2007); Susan Myra Kingsbury, ed., *The Records of the Virginia Company of London* (4 vols.; Washington: Government Printing Office, 1906-35) (以下 RVCL と略記)。

⁵ William Waller Hening, ed., *The Statutes at Large; Being a*

Collection of All the Laws of Virginia, from the First Session of the Legislature, in the Year 1619 (13 vols.; Richmond: Samuel Pleasants, 1809-1823); Anonymous, *A Perfect Description of Virginia*, (1649), in Peter Force, ed., *Tracts and Other Papers* (4 vols.; New York: Peter Smith, 1947), II (VIII); Robert Beverley, *The History and Present State of Virginia*, (1705), ed. Susan Scott Parrish (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2013).

⁶ John Winthrop, *History of New England*, ed. James Kendall Hosmer (2 vols.; New York: Scribner, 1908); Warren Billings, ed., *The Papers of Sir William Berkeley, 1605-1677* (Richmond: Library of Virginia, 2007).

ジニア植民地を下回るようになった(表1)。そのようななかでオペチャンカナウが1644年に引き起こした第三次戦争については、フランセス・モシカーがオペチャンカナウは「戦って死ぬことを選んだ」と述べるなど、無謀な試みであったとの評価がなされてきた⁷。

それに対し、アダムズは第三次戦争の前までにパウハタン連合がカロライナ地域のインディアンを配下に入れるようになっていたことを示して、連合と植民地の力関係が逆転していたという従来の研究者の見解に疑義を呈している(図2)。アダムズが参照したエドワード・ブランドによる1650年の内陸部の探索の記録には、カロライナ地域のメヘリン(Meherrin)族のインディアンがオペチャンカナウを自分たちの「偉大な帝王」と呼んでいたことが記されていた。また、アダムズが紹介しているベヴァリーの記述によると、バークレーは、バークレーが入植者に対してできる10倍の数のインディアンをオペチャンカナウが戦場に動員することができると考えていたという⁸。

アダムズが参照したメヘリン族のインディアンの発言は、例えばフィリップ・L・バーバーによって、パウハタン連合のカロライナ地域への拡大を示すものとして古くからとりあげられていた⁹。しかしながら、初期ヴァージニア入植者がカロライナ地域への探索にほとんど行かなかったために一次史料に乏しく、パウハタン連合とカロライナ地域のインディアンの関係はこれまでほとんど明ら

かにされてこなかった。そして、パウハタン連合がカロライナ地域にまで権威を及ぼしていたとする解釈も共有されてこなかった。それでも、アダムズが言及していない断片的な一次史料も、カロライナ地域へのパウハタン連合の拡大を示している。1619年にオペチャンカナウが入植者に提案した共同軍事遠征計画において、それに参加するのは「ロアノーク(Roanoke)、パウハタン、パマンキー(Pamunky)の三つの川の配下」の部族と述べられていた。また、1644年の急襲後の入植者の反撃対象にカロライナ地域のチョワノク族とセコタン(Secotan)族があげられていたことは、両部族が第三次戦争において連合陣営にいたことを示している¹⁰。したがって、地理的に距離が遠いカロライナ地域のインディアンに対してはポトマク族やアコマク族と同様にパウハタン連合の権威が強力に及んでいたとは考えにくいけれども、第三次戦争以前にパウハタン連合と植民地の力関係が逆転していたとは必ずしもいえないのである。

1-2. 1644年の急襲と第三次アングロ・パウハタン戦争の経過

1644年4月の急襲におけるイングランド人入植者の死者数は、先行研究によって多少の相違がみられる。フレデリック・グリーチは「400人近く」、ラウントリーは「400人程度」、イーサン・A・シュミットは「400から500人のあいだのどこか」、そして、ウィリアム・L・シェーは「500人近く」と

⁷ 初期ヴァージニアにおけるインディアンと入植者の関係やパウハタン連合諸部族の動向については2人の文化人類学者による研究が詳しい。Frederic W. Gleach, *Powhatan's World and Colonial Virginia: A Conflict of Cultures* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1997); Helen C. Rountree, *Pocahontas, Powhatan, Opechancanough: Three Indian Lives Changed by Jamestown* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2005)。オペチャンカナウの1644年の急襲を無謀な試みと断ずる研究は、Alfred A. Cave, *Lethal Encounters: Englishmen and Indians in Colonial Virginia* (Santa Barbara: Praeger, 2011), 134; Frances Mossiker, *Pocahontas: The Life and the Legend* (New York: Knopf, 1976), 311; William L. Shea, *The Virginia Militia in the Seventeenth Century* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1983), 59。

⁸ Edward Bland, *The Discovery of New Brittain*, (1651), in A. S. Salley, ed., *Narratives of Early Carolina, 1650-1708* (New York: Charles Scribner's Sons, 1911), 11; Beverley, *History and Present State*, 48; Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 29-31。

⁹ Philip L. Barbour, "Ocanahowan and Recently Discovered

Linguistic Fragments from Southern Virginia, c. 1650," in William Cowan, ed., *Papers of the Seventh Algonquian Conference, 1975* (Ottawa: Carleton University, 1976), 11。

¹⁰ RVCL, III: 228; "Acts, Orders and Resolutions of the General Assembly of Virginia," *Virginia Magazine of History and Biography* 23.3 (1915): 230 (以下VMHBと略記)。セコタン族について、原文では「シーコック(Seacock)」族となっているが、セコタン族を表すものと解釈されている。Martha W. McCartney, "Seventeenth Century Apartheid: The Suppression and Containment of Indians in Tidewater Virginia," *Journal of Middle Atlantic Archaeology* 1 (1985): 53; Kristalyn Marie Sheffveland, *Anglo-Native Virginia: Trade, Conversion, and Indian Slavery in the Old Dominion, 1646-1722* (Athens: University of Georgia Press, 2016), 15。これらの一次史料を紹介しているE・ランドルフ・ターナー三世は、パウハタン連合とカロライナ地域のインディアンのあいだの関係を友好的関係と述べるにとどめている。E. Randolph Turner, III, "Native American Protohistoric Interactions in the Powhatan Core Area," in Helen C. Rountree, ed., *Powhatan Foreign Relations, 1500-1722* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1993), 80-81。

説明している¹¹⁾。

先行研究における死者数の相違は、急襲を伝えた当時の複数の史料やベヴァリーの著書の記述の相違に由来している（表3）。アダムズが列挙しているそれらの史料は、急襲直後の6月の植民地議会の記録、本国で発行された議会派のニューズブック『メルキュリウス・シヴィカス(*Mercurius Civicus*)』においてヴァージニア植民地住人からの書簡に基づいて書かれた1645年5月の記事、急襲に関する情報をヴァージニアから来た船員からきいたウィンスロップの記述、ニュー・イングランドに住むピューリタンのエドワード・ジョンソンの1654年の記述、そして半世紀以上が経過したベヴァリーの著書である。それらの記述における1644年の急襲の死者数は、300人から600人まで幅がある。アダムズは、1644年の急襲を受けた当時のヴァージニア植民地住人自身の情報に基づく植民地議会や『メルキュリウス・シヴィカス』の400人近くあるいは400人程度とみなすのが妥当であると述べている¹²⁾。

1644年の急襲における入植者の死者数は1622年の急襲の死者数347人より多かったが、植民地人口全体における死者数の割合は大幅に小さくなった。1622年の急襲の死者数は当時の植民地人口全体の30%近くにまで及んでいたものの、1644年の急襲では5%ほどにすぎなくなっていたのである。先行研究は、1630年代のパウハタン連合の縮小を説くとともに、1644年の急襲での入植者の死者の割合の小ささを強調してきた。そして、第三次戦争の経過についても入植者の優位を描いてきた。例えば、ラウントリーは、急襲後に遠く南方に撤退したウィーノク(Weyanoke)族がオペチャンカナウの派遣したインディアンを殺害したとする証言を紹介したうえで、インディアン若者の連合の隆盛を誇っていた時代を知らない可能性を指摘

して、連合インディアンの分裂の傾向を読み取ってきた¹³⁾。確かに、入植者の残した一次史料から確認できる限りにおいて第三次戦争の経過をまとめても、戦争が入植者の優勢に進んだこと自体は否定しがたい（表4）。

その大局は否定しないながらも、アダムズは、イングランド人内部の政治的混乱のなかで入植者が物資の不足に大きな悩みを抱えていたということとを主張した。総督代理リチャード・ケンプは1645年2月のバークレーに宛てた書簡において、「人々の武器や衣服の両方のひどい欠乏」のために、国王派としての植民地の立場にも関わらず議会派の船と取引を行なったこと、また、武器の不足のなかでインディアンの攻撃を受けたことを報告していた¹⁴⁾。つまり、従来の研究者が考えていたよりも、第三次戦争は入植者の一方的な展開ではなかったことが明らかにされたのである。

1-3. パウハタン連合の解体

第三次アングロ・パウハタン戦争を終結させた1646年の条約では、パウハタン連合の維持が認められていた。第一条において、「インディアンの王」ネコトワンス(Necotowance)と彼の後継者はイングランド国王陛下のもとで「彼の王国を保持」し、「後継者はそのときどきに国王の総督によって任命、あるいは承認され」、そして、植民地を代表して植民地議会が彼と彼の後継者を連合内外の反徒や敵から保護すること、さらに、彼と彼の後継者による毎年毛皮の貢納の義務が明記された。しかしながら、必ずしも経過は明らかではないものの、パウハタン連合は解体に向かうこととなった。マーサ・W・マッカートニーは、ネコトワンスが1649年に貢納のために総督を訪れた際、インディアンの首長を5人ほどしか携えていなかったことに連合の権威の弱まりを指摘している。また、グ

¹¹⁾ Gleach, *Powhatan's World and Colonial Virginia*, 175; Rountree, *Pocahontas's People*, 84; Ethan A. Schmidt, *The Divided Dominion: Social Conflict and Indian Hatred in Early Virginia* (Boulder: University Press of Colorado, 2015), 126; Shea, *Virginia Militia*, 58.

¹²⁾ “Acts, Orders and Resolutions,” 229; *Mercurius Civicus* 104, 15-22 May 1645; Winthrop, *History*, II: 167; Edward Johnson, *Wonder-Working Providence of Sions Savior in New England*, (1654), ed. J. Franklin Jameson (New York: Charles Scribner's Sons, 1910), 266; Beverley, *History and Present State*, 46; Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 81. なお、本国で発

行された『メルキュリウス・シヴィカス』の記事は、データベース Early English Books Online (EEBO)にて閲覧が可能であるほか、ジョゼフ・フランクによって紹介されている。Joseph Frank, “News from Virginnny, 1644,” *VMHB* 65.1 (1957): 84-87.

¹³⁾ Rountree, *Pocahontas, Powhatan, Opechancanough*, 232.

¹⁴⁾ Richard Kemp, letter to William Berkeley, 27 Feb. 1645, in Billings, ed., *Papers of Sir William Berkeley*, 62-66; Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 124.

リーチは入植者による土地の付与がネコトワンスではなく各部族の首長にあててなされたことに連合の解体をみている¹⁵。

アダムズは連合を解体に向かわせた原因について、イングランド人指導者トマス・ラドウェル(Thomas Ludwell)の1678年の言葉を引用して、イングランド人の側の視点から検討している。ラドウェルによれば、イングランド人が手を加えなくとも「互いに戦争をして自分たちで壊滅する」よう、バークレーが各部族を分裂させておいたのだという¹⁶。しかしながら、このラドウェルの発言は、バークレー自身が交渉にあたった1646年の条約の文言と矛盾しているようにみえる。

連合の解体の過程については、イングランド人側の視点からだけでなく、インディアンの視点からの分析が重要である。そもそもパウハタン連合は、各部族が連合に対する貢納と引き換えに連合から保護を享受する互惠関係によって成り立っていた¹⁷。そのため、第三次戦争によってパウハタン連合が入植者に敗北したいま、連合から保護を受けることへの各部族の期待は薄まっていかなかった。つまり、第三次戦争によって連合と各部族のあいだの貢納と保護の互惠関係の瓦解が起き、インディアン自身の側から連合の解体が進んだといえるのではないだろうか。

2. 四王国戦争

第三次アングロ・パウハタン戦争を分析するにあたってアダムズが初めて用いたウィンスロップの史料には、戦争中に入植者の捕虜となったインディアンの証言が書き留められていた。そこには、オペチャンカナウが1644年に急襲を起こした時機とそれまでの取り組みについての情報が二つ記されていた。一つ目は、オペチャンカナウがイングランド人内部の混乱を急襲のための絶好の機会と考えたことである。そして二つ目は、広域のインディアンが同盟を組んでヨーロッパ系入植者に

抵抗しようとしていたことである。

[1644年](5月)20日 ヴァージニアから船が来て、最近、原住民による大虐殺がその地のイングランド人に対して引き起こされ、[死者]数は少なくとも300人にのぼることが伝えられた。そこで捕虜とされたインディアンが白状したところによると、彼らが[大虐殺を]遂行したのは、イングランド人が彼らの土地を全て奪っていくのを見て、彼らの国から彼らを追い出してしまうだろうと考えたためであり、彼らがこの時機を選んだのは、イングランドで戦争が起き、自分たちのあいだの戦争に行き始めたことがわかり、[ジェームズ]川で議会派のロンドンの船と国王派のブリストルの船のあいだで戦いが起きたのを見ていたからだという。さらに彼によれば、600マイル以内の全てのインディアンと一緒に同盟を結成し、この国から全てのよそ者を追い出そうとしているのだという¹⁸。

第三次戦争とイングランド内戦の関連について、オペチャンカナウの視点だけでなく、入植者の戦争の遂行においても本国イングランドの戦況が関わっていた。急襲の後、入植者はインディアンに対して宣戦布告をし、総督バークレーは武器の調達のために本国に渡った。しかしながら、バークレーが予期した通り、本国で戦争中の国王チャールズは植民地に対する支援を断った。一方、議会派は植民地に武器や物資を送ることを1644年8月に決定し、議会派の船が1645年1月に植民地に到着した。それまで入植者が物資の深刻な欠乏に悩まされていたことは、先のケンプのバークレー宛書簡に書かれている通りである¹⁹。このように、ヴァージニアにおける第三次戦争がイングランド人内部の動乱と関わり合っていたことは、近年の近世ブリテン史研究者が見直しを進めてきた三王

¹⁵ Hening, ed., *Statutes at Large*, I: 323-326; Gleach, *Powhatan's World and Colonial Virginia*, 184-185; Martha W. McCartney, "Cockacoeske, Queen of Pamunkey: Diplomat and Suzeraine," in Gregory A. Waselkov, Peter H. Wood, and Tom Hatley, eds., *Powhatan's Mantle: Indians in the Colonial Southeast* (2nd ed.; Lincoln: University of Nebraska Press, 2006), 244-245.

¹⁶ Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 201-202.

¹⁷ Seth Mallios, *The Deadly Politics of Giving: Exchange and Violence at Ajacan, Roanoke, and Jamestown* (Tuscaloosa: University of Alabama Press, 2006), 12.

¹⁸ Winthrop, *History*, II: 167-168.

¹⁹ Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 51, 100-101, 136; Timothy B. Riordan, *The Plundering Time: Maryland and the English Civil War 1645-1646* (Baltimore: Maryland Historical Society, 2004), 130-151, 164.

国戦争にさらなる修正をせまるものである。つまり、ブリテン帝国全体でインディアン王国を加えた四王国戦争が起きていたとする解釈ができるのである。

J・G・A・ポーコックは、1970年代、ブリテン史がイングランド中心主義を脱却し、ブリテン諸島の各王国の歴史を包摂したうえで、ブリテン帝国の拡大とともに大西洋を越えた視座を持つべきだとするニュー・ブリティッシュ・ヒストリーを提唱した。そして、1990年代以降、近世の礫岩のような複合政体を明らかにするヨーロッパ国制史研究とも補完し合いながら、ブリテン諸島三王国のそれぞれの主体性と相互関係の分析が大きく進むようになった²⁰。また、デイヴィッド・アーミティージは、三王国間の関係性にブリテン帝国のイデオロギーの起源を求め、大西洋を越えた視座から複合国家論と帝国論を接続させている²¹。

そのような研究動向のなかで、1637年のスコットランドに対するイングランド国教会の儀式と祈祷書の強制から始まり、アイルランドの反乱、イングランドの内戦、そして1649年の国王チャールズの処刑へと至る一連の出来事は、「大反乱」、「ピューリタン革命」、「イングランド（イギリス）革命」、「イングランド内戦」を経て、現在では「三王国戦争」という呼称が受け入れられるに至っている。三王国戦争という概念によって、三王国の住人が国境を超えて戦争に参加したほか、三王国間の国制上の編成が争点となっていたことが明らかにされている²²。しかしながら、アメリカ植民地との関わりについては、本国における政治的、宗

教的対立の植民地への波及や新旧イングランドのピューリタンのネットワークが論じられるにとどまり、その外側にいるインディアン王国が射程に入ることはなかった²³。ポーコックのニュー・ブリティッシュ・ヒストリーの構築はいまだ道半ばにあったのである。

1607年に入植したイングランド人は、しばらくするとパウハタン連合のインディアンをイングランド国王の配下に入れる取り組みを始めた。1608年秋には、入植者がイングランド国王からの王冠をパウハタンに授ける戴冠式が催された。1609年から始まった第一次アングロ・パウハタン戦争中、この戴冠式はパウハタン自身がイングランド国王に忠誠を誓ったものとして植民地総督デラウェア(De La Warr)によって引き合いに出された。また、1616年のポカホンタスのイングランド訪問の際、スミスはアン王妃に宛てた請願において、ポカホンタスを厚遇することが「この王国の領土にもう一つの王国を加える」ことにつながると述べていた²⁴。連合をイングランド国王配下に入れるこのような取り組みが結実したのが、第三次アングロ・パウハタン戦争を終結させた1646年の条約である。その後、旧パウハタン連合のインディアンは、植民地住人とのあいだに土地の境界をめぐるトラブルや殺害事件を引き続き経験し、1676～1677年のベーコンの反乱では反乱軍の攻撃にさらされた。それでも、その際に本国から派遣されてきた国王使節は、外部のインディアンとのあいだの仲介や緩衝といった帝国の内部の存在としての役割を期待して、旧パウハタン連合のインディアンとの和

²⁰ J・G・A・ポーコック（犬塚元監訳）『島々の発見：「新しいブリテン史」と政治思想』（名古屋大学出版会、2013年）；古谷大輔、近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』（山川出版社、2016年）；岩井淳編著『複合国家イギリスの宗教と社会：ブリテン国家の創出』（ミネルヴァ書房、2012年）；山本正「ブリテン史」岩井淳、指昭博編『イギリス史の新潮流：修正主義の近世史』（彩流社、2000年）、211-232頁。

²¹ David Armitage, *The Ideological Origin of the British Empire* (Cambridge, Eng.: Cambridge University Press, 2000)（平田雅博ほか訳『帝国の誕生：ブリテン帝国のイデオロギー的起源』日本経済評論社、2005年）；岩井淳「「ブリテン帝国」の成立：16～17世紀の帝国概念と古代ローマ」（特集「帝国」への新たな視座）『歴史学研究』776号（2003年6月）、19-30頁。

²² 岩井淳「「大反乱」から「ブリテン革命」へ：17世紀中葉の事件をめぐる長き論争」『イギリス哲学研究』34号

（2011年）、97-105頁；ジョン・モリル（富田理恵訳）「17世紀ブリテンの革命再考」『思想』964号（2004年8月）、52-75頁。なお、ジェーン・H・オーマイヤーはヨーロッパ史の文脈に三王国戦争を位置付け、フランスとスペインのアイルランド支援によって「五王国戦争」になったと述べている。Jane H. Ohlmeyer, *Civil War and Restoration in the Three Stuart Kingdoms: The Career of Randal MacDonnell, Marquis of Antrim, 1609-1683* (2nd ed.; Dublin: Four Courts Press, 2001)。

²³ Carla Gardina Pestana, *The English Atlantic in an Age of Revolution, 1640-1661* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2004), chaps. 1-4; 岩井淳『千年王国を夢見た革命：17世紀英米のピューリタン』（講談社、1995年）。

²⁴ John Smith, *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isles*, (1624), in *Complete Works*, II: 183-84, 260; William Strachey, "A True Reportory," (1625), in *Writings with Other Narratives*, 1031-1032.

平を主導していた²⁵。

17世紀前半のヴァージニアにおいてイングランド人入植者がインディアンをイングランド国王の配下に入れようとしていたことを、譲渡と再受封を始めとした16世紀半ば以降のアイルランドでの取り組みと関連付ける研究がある²⁶。それは、デイヴィッド・B・クイン(David B. Quinn)からニコラス・キャニーらに引き継がれている研究であり、社会経済史のみならず国制史や政治史のアプローチによってアイルランドを植民地とする視座からブリテン帝国を分析してきた。この観点からは、オペチャンカナウの急襲に始まるヴァージニアの第三次アングロ・パウハタン戦争は、アイルランドの反乱とともに、イングランド(ブリテン)による植民地化に対する抵抗運動としての類似性がみられるのである。

一方で、第三次アングロ・パウハタン戦争とブリテン諸島の三王国戦争は、連動しながらも別個の戦争であったことも事実である。本国の住人は三王国間の国境を越えたのと同じように大西洋を越えて植民地での戦争に参加したわけではなかったし、インディアン王国がブリテン諸島の三王国間の国制上の関係性をめぐる議論に同じように加わってはいなかった。このようにみると、大西洋を越えた四王国戦争という概念は、植民地という点ではヴァージニアと共通点を持ちながらブリテン諸島の一王国でもあるという、アイルランドの性格をより明瞭に表現できるのである。

3. 広域インディアンの同盟

ウィンスロップはヴァージニアのインディアン捕虜の証言として、「600マイル以内の全てのインディアンが一緒に同盟を結成し、この国から全て

のよそ者を追い出そうとしている」と書き留めていた。ヴァージニアから600マイルとは、北方は五大湖周辺地域までも含む広範な地域である。実際、1640年代には、ニュー・ネーデルランド入植者とその地のインディアンのあいだで戦争が起き、ニュー・イングランドのインディアンもヨーロッパ人入植者に対する戦争の準備を行っていた²⁷。

近年の初期アメリカ史研究は、大西洋地域を一つの地域システムとみなすアトランティック・ヒストリーの議論の定着とともに、トランスナショナルな視座から、イングランド系植民地ではないニュー・スウェーデンやニュー・ネーデルランドの分析も進んでいる²⁸。アトランティック・ヒストリーに対するアプローチの仕方については、アーミテージが三種類に分類している。一つ目は、大西洋世界内部の相互連関を分析するサーカム・アトランティック・ヒストリー、二つ目は、比較史のトランス・アトランティック・ヒストリー、そして、三つ目は、大西洋の文脈で一地域を扱うシス・アトランティック・ヒストリーである²⁹。それに従えば、広域インディアンの同盟の分析は、広域とはいえ、大西洋世界全体をとらえたうえで北アメリカ大陸のインディアンと入植者の関係进行分析するシス・アトランティック・ヒストリーに分類される。

また、アメリカ史全般にいえることとして、1960年代以降、歴史学、文化人類学、考古学の学際的協力によって、インディアンを歴史叙述の中心に据えるニュー・インディアン・ヒストリーの提唱のもと、インディアンとヨーロッパ系住人の関係の歴史の研究が進展してきた³⁰。しかしながら、これまでの研究で、入植地が海岸沿いに散在するに

²⁵ McCartney, “Cockacoeske, Queen of Pamunkey,” 248-54; Rountree, *Pocahontas's People*, chaps. 5-6.

²⁶ Nicholas Canny, “England's New World and the Old, 1480s-1630s,” in *The Origins of Empire: British Overseas Enterprise to the Close of the Seventeenth Century* (The Oxford History of the British Empire I, Oxford: Oxford University Press, 1998), esp. 157. アイルランドの動向については、山本正『「王国」と「植民地」：近世イギリス帝国のなかのアイルランド』(思文閣出版、2002年)；同「王国への昇格と植民地化の進展」上野格、森ありさ、勝田俊輔編『アイルランド史』(世界歴史大系、山川出版社、2018年)、73-128頁。

²⁷ ニュー・イングランドの動向については以下が詳しい。Michael Leroy Oberg, *Uncas: First of the Mohegans* (Ithaca: Cornell University Press, 2003).

²⁸ この点については、日本アメリカ史学会の第43回例会「初期アメリカ史研究の新潮流」(2018年12月)でも議論がなされた。

²⁹ David Armitage, “Three Concepts of Atlantic History,” in David Armitage and Michael J. Braddick, eds., *The British Atlantic World, 1500-1800* (New York: Palgrave Macmillan, 2002), 11-27; バーナード・ベイリン(和田光弘、森丈夫訳)『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年。

³⁰ Robert F. Berkhofer, Jr., “The Political Context of a New Indian History,” *Pacific Historical Review* 40.3 (1971): 357-382; 野口久美子「北米ネイティブ・アメリカン史研究における理論の変遷と模索」『史苑』(立教大学) 70巻1号(2009年12月)、73-94頁。

すぎない 17 世紀前半に関しては、インディアンと入植者のあいだの出来事におけるインディアン側の視点の分析は、各植民地や隣接した植民地に分割して行なわれてきた。つまり、トランス・リージョナルな視点からの広域のインディアンの相互作用は検討がなされてこなかったのである。

アダムズは、ウィンスロップが書き留めた広域インディアンの同盟の存在に懐疑的である³¹。しかしながら、断片的な一次史料や考古学の研究成果は、その同盟の存在を裏付けている。17 世紀までのインディアンの広域の活動については、各地域をつなぐ道が四方に広がっていたこと³²、そして、広範な地域との取引の活動がなされていたことがわかっている。また、ヴァージニア植民地でスパイ活動をしていたフランシス・マグネル (Francis Maguel) は、「この帝王 [パウハタン] は幾人かを毎年陸路で西インドやニューファンドランド、その他地域に送っていて、何が起きているかを確認している」と 1610 年に述べていた³³。したがって、広域のインディアンは、ヨーロッパ人の入植に関する様々な情報を相互に伝達し合っていた。そして、ウィンスロップが書き留めた証言は、同盟がどの程度強固で密なものだったかは留保が必要なものの、ヨーロッパ人の入植に同様に直面している広域のインディアンのあいだで意思の共有がなされていたことを示している。ヨーロッパ人の到来以前からインディアンがアメリカに持っていた大きなネットワークは、17 世紀前半の大西洋世界においてヨーロッパ人の入植に対する抵抗の重要な基盤としての機能を持っていたのである。

おわりに

第三次アングロ・パウハタン戦争の分析に幅広い史料を用いたアダムズの努力は、その戦争に関する事実関係の検証作業を大きく進めた。先行研究が描き出してきたオペチャンカナウによる無謀な戦争としての第三次戦争の歴史像に対し、アダムズの主張とそれへの検証によって明らかになったのは、第三次戦争中に入植者が物資の不足に苦

しんでいたという内実とともに、地理的に広い視野を持ったオペチャンカナウのその戦争までの取り組みである。オペチャンカナウが 1644 年に急襲を率いたのは、カロライナ地域のインディアンを連合陣営に組み込んだほか、広域のインディアンが同盟を結成し、イングランド人同士の内乱に乗じることができたためであった。

アダムズが意図しなかった最大の功績は、近世ブリテン史やアトランティック・ヒストリーの研究者に新たな論点を提供したことにある。ブリテン史研究者がブリテン諸島の三王国間の関係性をめぐる争いと解釈するようになっている三王国戦争は、ヴァージニアのインディアン王国をイングランド国王の配下に入れた第三次アングロ・パウハタン戦争とともに四王国戦争を構成するものであった。四王国戦争という概念においては、近世ヨーロッパの国制史研究の射程をアメリカまで広げ、インディアン王国を含めた視座からブリテンの複合政体を明らかにしていく必要があるのではないか。また、第三次アングロ・パウハタン戦争は、ヨーロッパ人入植者に対するインディアンの広域同盟の抵抗の一部でもあった。広域のインディアンを互いに有機的につながった一つの大きな集団としてとらえることは、大西洋世界における一つの巨大なファクターとしてインディアンの主体的活動を見直すことにつながるのではないか。

³¹ Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 85.

³² インディアン・トレイルについては、例えば、Helen C. Rountree, "The Powhatans and Other Woodland Indians as

Travelers," in *Powhatan Foreign Relations*, 21-52.

³³ Barbour, ed., *Jamestown Voyages*, 154.

表 1：人口推移

（パウハタン連合の人口はカロライナ地域を含まず、ヴァージニア植民地の人口はアフリカ系住人を含む。）

年	（旧）パウハタン連 合	ヴァージニア植民地
1607	14,000	104
1620	—	900
1630	—	2,400
1640	5,000 以下	8,000
1650	—	12,400
1660	—	20,900
1670	（1669 年）2,900	29,600

[Rountree, *Pocahontas's People*, 79, 96; John J. McCusker and Russell R. Menard, *The Economy of British America, 1607-1789, with Supplementary Bibliography* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1991), 136 より作成。]

図 2：1607 年時点でのパウハタン連合とカロライナ地域のインディアン部族



[Helen C. Rountree, “Trouble Coming Southward: Emanations through and from Virginia, 1607-1675,” in Robbie Ethridge and Charles Hudson, eds., *The Transformation of the Southeastern Indians, 1540-1760* (Jackson: University Press of Mississippi, 2002), 67 を一部修正。]

表 3：1644 年 4 月の急襲によるイングランド人入植者の死者数

史 料	死 者 数
植民地議会（1644 年 6 月）	「400 人近く」
『メルキュリウス・シヴィカス』（1645 年 5 月）	「400 人」
ジョン・ウィンスロップ	「少なくとも 300 人」
エドワード・ジョンソン（1654 年）	「500 か 600 人」
ロバート・ベヴァリー（1705 年）	「500 人近く」

[Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 81 より作成。]

表 4：第三次アングロ・パウハタン戦争の経過

1644 年 4 月 18 日	オペチャンカナウの二度目の急襲。ジェームズ川の南側とヨーク川の上で被害が大きい。急襲後、ウィーノク族は入植者の反撃を恐れてカロライナ地域へ逃れ、オペチャンカナウが派遣したインディアンを殺害。(Beverley, 46-47; “Indians,” 349-50, “(Concluded),” 4-11)
4 月 30 日	植民地参事会にて、ミドル・プランテーションへの守備隊の配置とインディアンに対する報復攻撃を指令。(McIlwaine, 501)
6～12 月	入植者がパマンキー族やチカホミニ族などを攻撃。 (“Acts,” 230-31; Billings, 62, 65; Hening, I: 287; Lewis, 66-67; McIlwaine, 501-02)
6 月下旬	総督バークレーが物資の補給のために本国へ渡航。不在期間はケンプが代理を務める（～1645 年 6 月 7 日）。(Lewis, 66, 69; McIlwaine, 501, 503)
秋～冬	インディアンが物資不足の入植者を攻撃。(Billings, 65)
1645 年 2 月	三つの砦（パマンキー川にロイヤル砦、チカホミニ川上部にジェームズ砦、ジェームズ川瀑布線付近にチャールズ砦）の建設を計画。また、アコマク族とラパハノク族は入植者側の陣営にて案内を務めることを確認。(Billings, 65; Hening, I: 293; Lewis, 67)
春～秋	リチャード・バネット(Richard Bannett)とトマス・デュー(Thomas Dew)をそれぞれ指揮官として、入植者がウィーノク族を追って南方へ遠征。他、インディアンに対する攻撃。(Lewis, 68-69; Saunders, I: 676; Walter, 180, 201)
6 月	オペチャンカナウが自身のもとにいる捕虜マーガレット・ウォーリー(Margaret Worleigh)を通じて和平交渉を申し出。(Streeter, 78-79)
1646 年 3 月	植民地議会にて、アポマトク川瀑布線付近でのヘンリー砦の建設やナンセモンド族らに対する攻撃を計画。同時に、入植者はインディアンに対するさらなる反撃の難しさや費用の大きさから和平の模索を確認。(Hening, I: 315, 317-19)
夏～10 月	バークレーはオペチャンカナウを捕虜にし、入植者の護衛がオペチャンカナウを殺害。オペチャンカナウの後継者ネコトワンスとバークレーが和平条約を締結。(Beverley, 47-48; Hening, I: 323-26)

[Adams, *Breaking the House of Pamunkey*, 236-247 (Appendix II) を参考に、以下の史料から作成。

“Acts, Orders and Resolutions,” 225-55; Beverley, *History and Present State*; Billings, ed., *Papers of Sir William Berkeley*; Hening, ed., *Statutes at Large*; “Indians of Southern Virginia, 1650-1711: Dispositions in the Virginia and North Carolina Boundary Case,” *VMHB* 7.4 (1900): 337-58, “(Concluded),” 8.1 (1900): 1-11; Clifford Lewis, ed., “Some Recently Discovered Extracts from the Lost Minutes of the Virginia Council and General Court, 1642-1645,” *William and Mary Quarterly* 20.1 (1940): 62-78; H. R. McIlwaine, ed., *Minutes of the Council and General Court of Colonial Virginia, 1622-32, 1670-76: With Notes and Excerpts from Original Council and General Court Records, into 1683, Now Lost* (Richmond, 1924); William L. Saunders, ed., *The Colonial Records of North Carolina* (Raleigh: P. M. Hale, 1886); Sebastian Ferris Streeter, *Papers Relating to the Early History of Maryland* (Baltimore: J. Murphy, 1876); Alice Granbery Walter, ed., *Lower Norfolk County, Virginia Court Records: Book “A” 1637-1646 & Book “B” 1646-1651/2* (Baltimore: Clearfield Company, 1994).]